

三年前のこと、賀茂の史跡巡りのグループで丹波の伊加古夜姫を祀る神社を参拝し、氷上郡の独鈷の滝に立ち寄った。細い流れに沿って登り、小橋を渡って滝前に至ると、水勢は激しく私共の人語を完全に遮断した。暫く茫然と眺めるうち、落下する垂直軸に逆らうのではなく凜然と上昇する、日常性を超えたベクトルを感じた。どう説明したらよいのか、眼前の光景と私の脳内イメージに同調し、共鳴してくるもの、古刀のほびを観たときのようなものと云っておこう。

今年八月は、出羽三山に登った。蔵王では小雨がしきりに煙って、頂上のお釜と呼ぶカルデラを観ることをパーテイの誰もが諦める。帰ろうとするのを引き止め、断崖の柵の所まで寄った時、スペクタクルは起こった。厚い霧の幕を強い息吹で裂き披くように湖面が現れ、深いエメラルド色の深奥を見た。否、見せてもらったと云った方が正しい。ずっと前、摩周湖でも同様の体験をしていたので、窺かに見せてくれるのではないかと内心は思っていた。いずれも、場の記憶の波動を強く受けるものである。

歴史勉強会を発足させ、手始めに『賀茂注進雑記』を輪読している。岡本清信氏から頂いた年表や既製の歴史年表を使って自分用の年表を作る。人名手控、また、索引メモを作る。専門書の類は索引があつて便利である。しかし、これとても著者や編者の関心で作られているので、今のような状況では自分用の項目を付け足したり、新しく作らざるを得ない。今、ちよつと迷っていることがある。後発の人達にこれらの索引等を残すことは一見親切なようであるが、かえつて、その人に発見や自覚の鋭い喜びを得るチャンスを取り上げてしまうことになる。なんとつて、読書の醍醐味はこのことなのだから。

『江家次第』、『禁秘抄』の埃を払うことも度かさなり、先学によって校注がつけられ釈が貼られているのを見ては感心する。御所勤めには有職に通暁する必要は当然であつたらう。しかも、のつびきならない知識、身についたものでなければ勤まらない。

今一つ『視聴雑感』を紹介しておきます。これは新官補直の季通の選述するもので、手元のもの、清茂の写本で伝わっている。内容は極く簡潔に誌されている。例えば、

「文明十二年庚子卯月日競馬装束新調」

たつた二十文字足らずのセンテンスである。一瞥、この視覚言語を読む私の脳の部位は、先に滝見で興奮した時とはまた違った興奮をするのである。応仁、文明の乱が治まって、僅か三年のうちの新調であればである。そして今も競馬会に奉仕する者にとつては単なる古い一事件として読み過ごせるものではないのはお解り頂けるであらう。

順徳院の著わされた『禁秘抄』の風雅な内容の一文を引いて終わりにしたい。

虫ノ事

「松虫鈴虫類 人々進之 或被召賀茂社司
堀河院御時 頭以下向嵯峨野 誠有逍遙
是給虫屋 向選虫奉之」